



農業・農村の「複合化」プロジェクト

—平成23-24年度:グリーンイノベーション創造プログラム—

○研究代表者: 藤田武弘 (観光学部)

○研究分担者: 大浦由美・大井達雄 (観光学部)、大西敏夫 (経済学部)

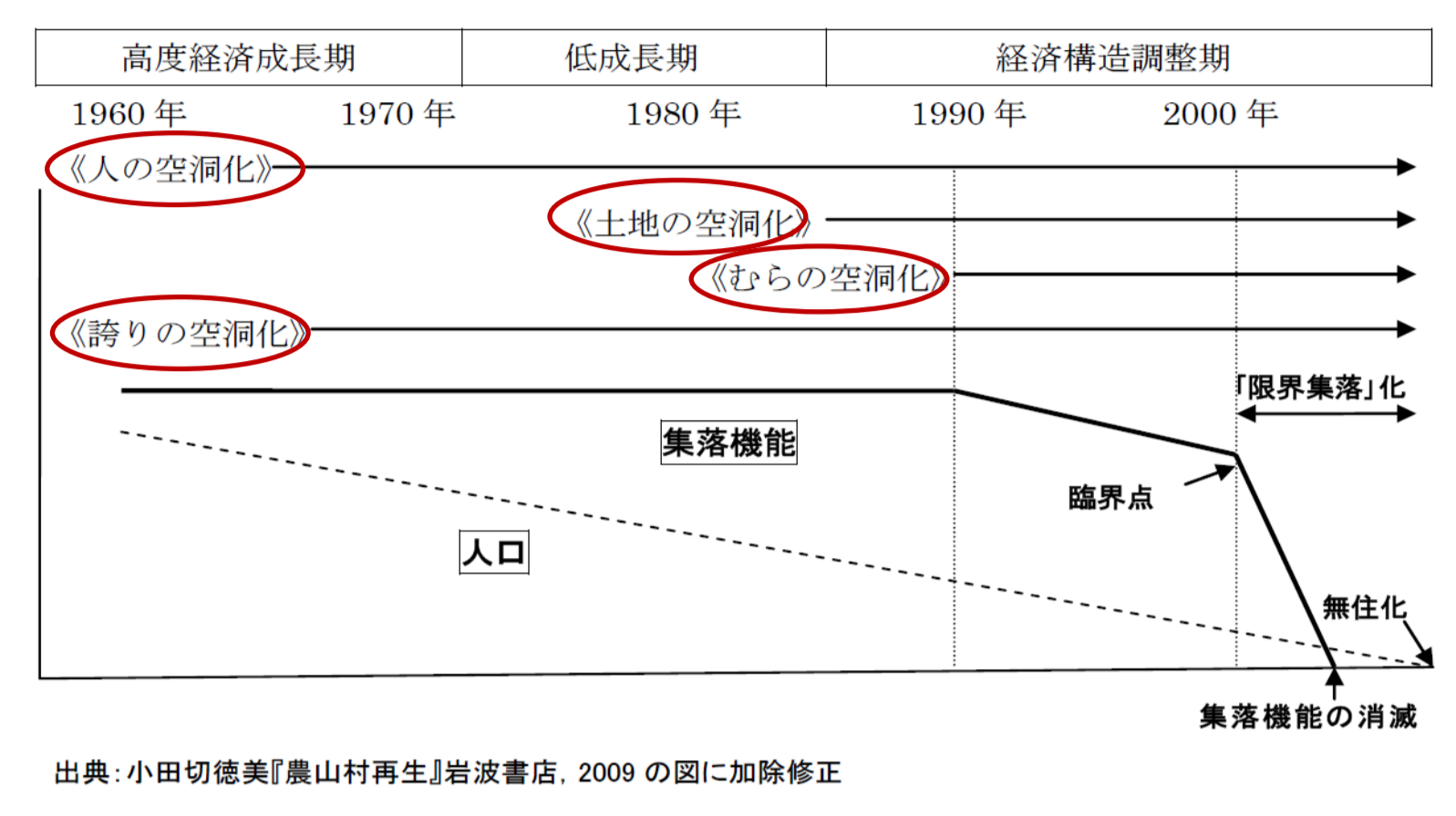


研究目的

戦後の高度成長過程で、都市と農村の格差は拡大し、農村では「ヒト・土地・むら・誇り」の空洞化が進んだ。しかし、近年では多様な都市農村交流活動が展開し、「誇り」の再生事例も見受けられるようになった(都市農村交流の「鏡効果」)。

本研究では、これらの動きに呼応する農業・農村の「複合化(多角的事業展開)」の取組に着目し、都市と農村の連携・協働の推進、地域資源活用型のコミュニティビジネス(CB)創成等の可能性を模索する。

図1 4つの「空洞化」と集落限界化のプロセス



出典: 小田切徳美『農村再生』岩波書店, 2009年の図に追加修正

日本型グリーン・ツーリズムの特徴

農村固有の地域資源の存在が社会的共通資本として多くの人々に認知され、かつ長期有給休暇制度を活用した滞在型ツーリズムが広く普及している西欧諸国のそれとは異なる。

長期的な滞在は難しいといえ、「リピーター」など反復的滞在を特徴とする都市の人々と共に、小規模ではあるが、心の通いあう人的交流(地域との繋がりを)を実現しようとするのが、日本型グリーン・ツーリズムの特徴である。

図2 日本型グリーン・ツーリズムの多様な展開



域学連携の基本視点

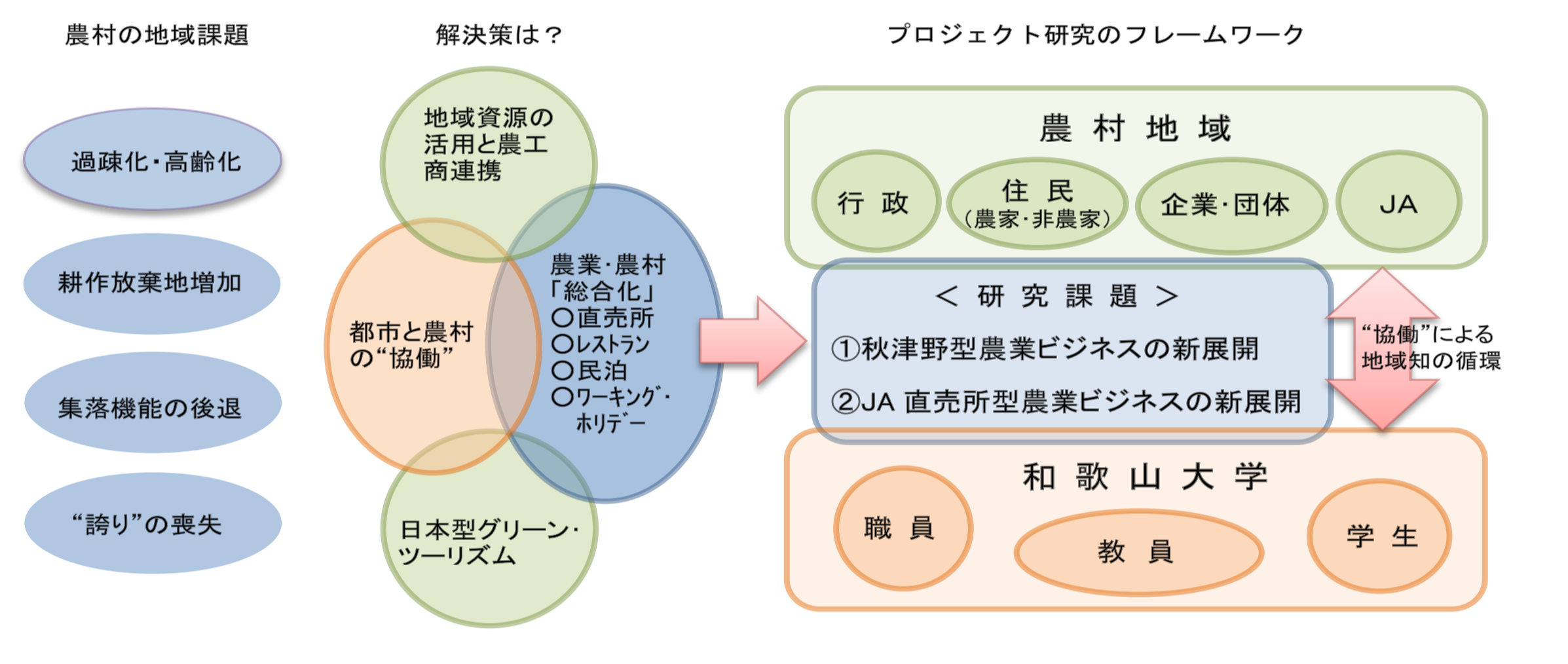
図3 農村/企業/団体/大学のSWOT

	農村	企業・団体	大学
内部要因	○豊富な地域資源 ○公益的機能の発揮 ○集落単位の結束力 ○「人の心を育てる」場	○人・物的資源と資金調達力 ○「団塊世代」の供給 ○社会的信用・ブランド	○高いモチベーション ○豊富な知的シーズ ○豊富な人的資源(学生) ○社会的信用・非営利
外部要因	○後継者難・人材不足 ○外部との接点欠如 ○「よそ者」への警戒感 ○インフラの未整備	○合意形成・意志決定が困難 ○本業の時間的制約 ○農村慣習・ルールに不慣れ ○帰属意識の軽薄化	○研究の継続性確保に難 ○商品化ノウハウに乏しい ○予算執行上の制約が大 ○地域連携への認識不足
機会	○農業・農村への高い関心 ○GT・農工商連携 ○行政の総合的支援 ○国産農産物の再評価 ○低炭素社会化の要請	○CSRへの社会的要請 ○福利厚生面での社員の期待 ○「団塊世代」の農村回帰志向	○地域貢献への予算誘導 ○地域再生への役割期待 ○地域経営への関心向上 ○インターシップの増加 ○ボランティアへの評価
脅威	○市場開放圧力 ○市町村合併の弊害 ○少子高齢化・過疎化	○景観の不透明感	○少子化で学生確保に難 ○財政基盤の低下

農村の「弱み」を補完する上で、大学には教員が有する「高い研究モチベーション・豊富な知的シーズ」と並んで、熱意のある正義感に溢れた学生たちという「人的資源」が存在することを忘れてはならない。

教員と学生とがともに膝を交えて地域課題に寄り添うことで、はじめて双発効果が生まれる。

プロジェクト研究のアウトライン



研究課題①: 農産物直売所

直売所機能の複合化に伴う「鏡効果」の検証

【分析対象・方法】

- JA紀の里「めつけもん広場」(和歌山紀の川市) 体験農業部会ヒアリング調査
- JAIいずみの「愛彩ランド」(大阪府岸和田市) 集荷者・利用者アンケート調査
- 直売所「きてら」農家レストラン「みかん畑」(和歌山県田辺市) 経済波及効果アンケート調査



研究課題②: 農家民泊・体験学習

“心と暮らしがみえる”交流と「鏡効果」の検証

【分析対象・方法】

- 先発事例へのヒアリング調査(大分県安心院町、長野県飯田市、沖縄県国頭郡伊江村)
- 受入農家へのヒアリング調査及びモニター・ワークショップの開催(和歌山県かつらぎ町、日高川町、紀の川市、田辺市)
- 体験教育旅行に伴う経済波及効果の推計(和歌山県白浜町)



研究課題③: ワーキングホリデー

“PartnerShip”に基づく援農と「鏡効果」の検証

【分析対象・方法】

- 先進事例へのヒアリング調査(長野県飯田市)
- 中間支援組織、受入農家へのヒアリング調査及びモニター(農作業、道普請など)・ワークショップの開催(和歌山県かつらぎ町、田辺市、岩手県奥州市)



【結果】→ JA紀の里・JAIいずみのとの連携事業
常設型直売所を核とする「複合化(地産地消レストラン、地元食材を活かした農工商連携による商品開発、農業体験活動への誘い等)」の取組は、ステークホルダーにおける意識変化(農業者:営農意欲向上/消費者:地域農業への理解醸成)を啓発し、都市農村交流の内容を深化(「鏡効果」を増幅)させることが明らかとなった。

【結果】→ 和歌山県庁(農林水産部)との連携事業
農家・農村の日常生活に入り込んだ交流が可能であることから、農村の「誇りの再生」に繋がる効果が大きい。受入農家の負担軽減が喫緊の課題である。「一戸完結型」ではない体験プログラムの開発や周辺施設との広域連携(「泊食分離」方式)を確立するなど、新規参入のハードルを下げる(農家女性の負担を軽減)ことの必要が明らかとなった。

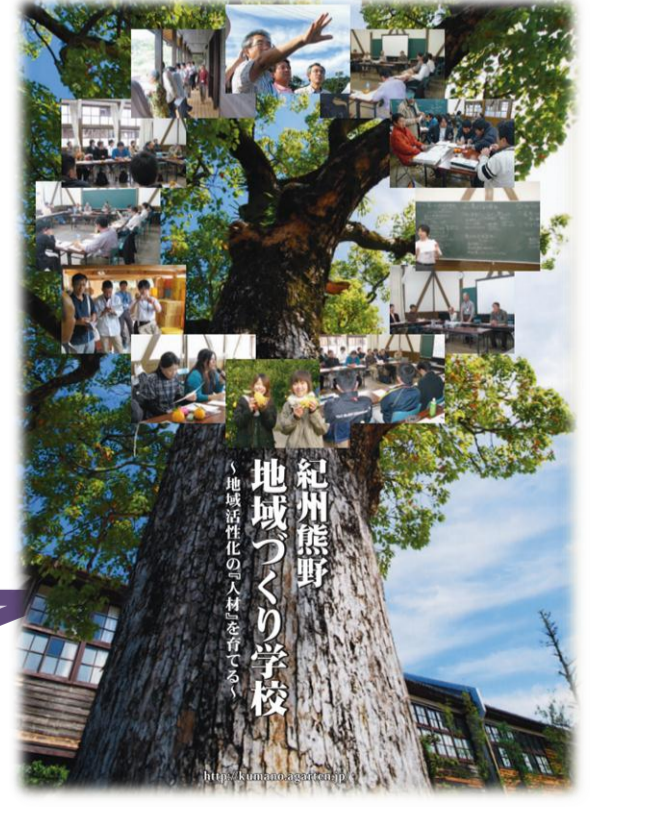
【結果】→ 和歌山県庁(農林水産部)との連携事業
都市住民一般を対象とする本格的なWHの導入を目的として実施した学生による「飯田方式(3泊4日)」モニターを通じて、農家民泊によるWHの場合には、極めて高い「鏡効果」が確認された。さらに、「交流」を積み重ねることで真の意味で「労働力補充」が期待され、農業・農村の新たな担い手となる可能性が示唆された。

研究課題④: ツーリズム大学

「鏡効果」を深化させる啓発可能性を検証

【分析対象・方法】

- 先進事例へのヒアリング調査(熊本県小国町「九州ツーリズム大学」など)
- 田辺市「紀州熊野地域づくり学校」における学生参加型実践と教育効果の検証(ゼミ学生の講義参加と自主演習)



【結果】→ (株)秋津野・田辺市との連携事業
地域循環型農工商連携によるCB創成には、直接的な現地ステークホルダーのみならず、「ツーリズム大学(ラーニングバケーション)」など地域外からの参加者と共に、地域資源の価値発見に取り組むことが効果的であり、そのためのコーディネート機能を果たす中間支援組織に対する行政支援が重要性を増していることが明らかとなった。

関連する研究実績 & 外部資金獲得状況

- 【著書】
 - 編著: 橋本卓爾・山田良治・藤田武弘・大西敏夫『都市と農村』日本経済評論社, 2011年
 - 分担執筆: 大橋昭一『現代の観光とブランド』同文館, 2013年(第21章「食料・農業と地域ブランド」)
 - 分担執筆: 青木義英・神田孝治・吉田道代『ホスピタリティ入門』新曜社, 2013年(第14章「都市農村交流の“鏡効果”とホスピタリティ」)
- 【論文】
 - 藤田武弘「グリーン・ツーリズムによる地域農業・農村再生の可能性」農業市場研究, Vol.21-3, pp.24-36, 012年(査読有り)
 - 岸上光克・藤田武弘「農山村地域における人材育成事業の現状と課題」農業市場研究, Vol.21-4(受理済), 2013年(査読有り)
 - 藤田武弘ほか「JA農産物直売所設置にともなう生産者の意識変化」観光学, No.8(受理済), 2013年(査読なし)
- 【外部資金】
 - 科研費: 都市と農山村の協働推進に資するCSR活動の意義とその発展方策に関する研究(代表/観光学/基盤(c)/2011年度~2013年度)
 - 科研費: グリーン・ツーリズム組織体の類型化と経営戦略(分担/経営学/基盤(c)/2011年度~2013年度)
 - 科研費: 離島農村地域における新たな都市農村交流ビジネスの展開と地域内経済効果の計測(分担/農業経済学/基盤(c)/2010年度~2012年度)

玉井 袈裟男
「風と土の詩」より

風は 遠くから 理想を含んで やって来るもの
土は そこにあって 生命を生み出し 育むもの
君 風性の人ならば 土を求めて吹く 風になれ
君が 土性の人ならば 風を呼び込む 土になれ
土は 風の軽さを 嗤(わら)い
風は 土の重さを さげすむ
愚かなことだ
風は 軽く 涼やかに
土は 重く 温かく
和して 文化を生むものを

